

世界遺産の学習材としての活用

— 社会科を中心的事例として —

皆川悠太

1. 論文構成

序章 問題の所在と研究

第1節 問題の所在

第2節 研究の目的と方法

第3節 論文の概要

第1章 小学校社会科における世界遺産を取り上げる意義に関する分析

第1節 指導要領での位置づけと単元構成との比較

第2節 先行研究での世界遺産の位置づけ

第3節 UNESCOの提唱する世界遺産教育とESD

第2章 世界遺産を取り上げた授業実践の比較

第1節 小学校社会科における世界遺産を取り上げた授業実践の比較

第1項 「平泉」を活用した実践の分析

第2項 「原爆ドーム」を活用した実践の分析

第3項 「石見銀山」を活用した実践の分析

第4項 「富士山」を活用した実践の分析

第5項 社会科における4つの授業実践の分析のまとめ

第2節 総合的な学習の時間における世界遺産を取り上げた授業実践の比較

第1項 「富岡製糸場」を活用した実践の分析

第2項 「宮原坑」を活用した実践の分析

第3項 「小笠原諸島」を活用した実践の分析

第4項 総合的な学習の時間における3つの授業実践の分析のまとめ

第3節 社会科と総合的な学習の時間の実践における世界遺産の取り扱いについての比較

第1項 社会科における世界遺産の取り扱い

第2項 総合的な学習の時間における世界遺産の取り扱い

第3項 取り扱いの違いについての分析

第3章 各学年の単元構成と世界遺産の取り扱いについての分析

第1節 小学校第5学年社会科の単元構成と世界遺産の取り扱い

第2節 小学校第6学年社会科の単元構成と世界遺産の取り扱い

第3節 中学校社会科の単元構成と世界遺産の取り扱い

第4節 これまでの分析の成果

第4章 世界遺産を題材とした小学校社会科の授業構想

第1節 授業づくりの視点

第2節 「明治日本の産業革命遺産群」を取り上げた授業例

第1項 単元の全体構成と授業例

終章 研究の成果と課題

第1節 研究のまとめと成果

第2節 今後の課題

参考文献一覧

2. 問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在

本研究にあたって問題の所在を述べる。

現在、日本には22の世界遺産が登録されており、日本各地で地元の遺産を世界遺産に登録しようとする動きが活発である。重要な文化財に関しては、学習指導要領の中ですべての学年において学習内容と関連させながら学習していくことが記述されているが、どのように学習していくかが不明瞭である。

地域の文化財の学習では地域性が出るという反面、学習できる文化財と学習内容に合わない文化財とで差が出ると考え、世界遺産に登録されている文化財を学習教材として活用することでその差を補完できると考えた。そのためには、各世界遺産がどの学習単元で学習することができるのかを分析していく必要がある。

世界遺産を活用した教育について、福山市立大学教授の田淵五十生氏は「世界遺産についての教育」「世界遺産のための教育」「世界遺産を通しての教育」の3つの教育形態に分類している。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、小学校社会科における各学年の目標・内容と世界遺産の性質を照らし合わせ、世界遺産が各学年の学習の中でどのような活用がされているかを分析するとともに、世界遺産を各学年の単元構成の中でどう関連させるかを考察するものであ

る。

研究の方法としてはまず、世界遺産の指導要領上での位置づけを分析した。指導要領の各学年の単元構成との比較を行い、また、先行研究者が世界遺産をどのように位置づけているかを分析した。そして、世界遺産を取り上げた授業実践を教科ごとに分析し比較を行うことで、各教科において世界遺産がどのようなねらいのもとで活用されているかの違いについて分析した。そのうえで小学校社会科において各学年の単元構成の中で世界遺産がどのように活用できるかを検討していった。遺産の特徴を踏まえ、各学年の目標を達成できるかどうかの検討を行い、どの単元でどの遺産を取り上げることが適切かを検討していった。そして、検討した内容をもとに授業構想を行い、社会科の授業の中で世界遺産を活用した学習を展開する一つの形を提案した。

3. 論文の概要

(1) 第1章

第1章第1節では指導要領内での文化財を学習教材とする場合の位置づけと単元構成を比較することで、世界遺産は学習の中でどのように取り扱われているのかを分析した。その結果、「地域の様子を捉えるための資料としての役割」「保存・継承の取り組みを知り、文化財の価値を認識し、保存・継承の意識を高める役割」「歴史的事象と関連させ、歴史の展開を考えるための資料としての役割」の3つの役割を持っていると判断した。

第2節では世界遺産教育の先行研究者である福山市立大学教授の田淵五十生氏と奈良教育大学教授の淡野明彦氏の2名の社会科とその他の教科における文化遺産の位置づけについての分析を行った。

田淵五十生氏は社会科における文化遺産の位置づけとして「地域学習における教材」「国際協力の重要性を学ぶための教材」の2点を挙げ、さらにその他の教科における文化遺産の位置づけについては「遺産そのものの価値認識を高めることに加え、周辺地域の人々の生活の変化から多面的な見方、考え方を養うための教材」としている。また、世界遺産を活用した教育はねらいによって教育形態が変化し、「世界遺産についての教育」「世界遺産のための教育」「世界遺産を通しての教育」の大きく3つに分類できるとしている。

淡野明彦氏は社会科における文化遺産の位置づけとして「地域学習における教材」「環境を保全することへの重要性を学習するための教材」「歴史学習と関連させて活用する教材」の3点を挙げている。また、

世界遺産と学年ごとのねらいとの関連性を述べており、第3, 4学年では地域学習との関連、第5学年では日本の自然についての学習との関連、第6学年では歴史学習との関連をもった学習が可能であると述べている。

第3節ではUNESCOの提唱する世界遺産教育とESDについて確認した。世界遺産教育における大きな目標は世界遺産の価値について理解することと世界遺産を保護していこうとする態度を養うことである。ESDを「一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革するための教育」と定義しており、「保全・持続」という点で、世界遺産教育と共通する点があることを確認した。

また、UNESCOの提唱する世界遺産教育では田淵氏の定義する「世界遺産のための教育」になる場合が多いことも特徴として挙げられた。

(2) 第2章

第2章の第1節では小学校社会科における世界遺産を取り上げた授業実践の分析と比較を行い、第2節では総合的な学習の時間における実践の分析と比較を行った。前節の先行研究者の位置づけやUNESCOの位置づけを踏まえ、世界遺産が学習の中でどのような題材として扱われているかを考察する。考察するための視点として、先行研究や定義されている位置づけから「国際理解の点から学習するための題材」「環境保全について学習するための題材」「地域の歴史を学習するための題材」「地域学習を行うための題材」「遺産の価値について学習するための題材」の5点を定めた。

第1節では第1項から第4項までで4つの授業実践の分析を行い、第5項で分析のまとめを行った。日本社会科教育学会、全国社会科教育学会、社会科系教育学研究学会の機関誌で掲載された論文、研究授業の中から4つの授業を選出した。その際は教材となる遺産が被らないように選出した。第1項から第4項までで分析した実践で扱われた世界遺産は「平泉」「原爆ドーム」「石見銀山」「富士山」である。4つの実践に共通していたのは遺産の価値について学習していたという点であった。これはUNESCOの提唱する世界遺産教育の目標と合致している。価値について学習することは学習内容との関連性を明確にするという意味もある。

第2節では第1項から第3項までで3つの授業実践の分析を行い、第4項で分析のまとめを行った。UNESCOが2005年から2014年までの10年間で実践

されたESD教育の実践の中で優良と認めた実践のうち世界遺産を取り上げた実践から分析する実践を選出した。ここで選出した実践で取り扱われた世界遺産は「富岡製糸場」「宮原坑」「小笠原諸島」である。

総合的な学習の時間で世界遺産を学ぶ場合、社会科と同様に遺産の価値について学習することは根底にあり、学習した内容をどのように生かしていくのか、どのように他者へ伝えていくのかということを考えていくという点が活動の特徴として確認することができた。

第3節では、第1節と第2節の分析を踏まえ、社会科と総合的な学習の時間における世界遺産の取り扱いの特徴の比較を行った。社会科においては世界遺産を通して学習内容を学ぶという特徴があり、位置づけとしては補助教材となる。総合的な学習の時間においては世界遺産を学習内容の中心に置き、学習を通して様々な技能を習得していくという特徴がある。この特徴を踏まえ、

- (1) 学習内容の中心に置かれているか
 - (2) 地域によって取り扱いの多様性があるか
 - (3) 世界遺産を学習する場合の授業のねらいの3観点から取り扱いの違いについて分析した。
- 教科の違いにより、同じ題材でも扱われ方に大きく違いがみられ、扱われ方に特徴があることを確認することができた。

(3) 第3章

第3章では第1節から第3節にかけて小学校第5学年、小学校第6学年、中学校における社会科の単元の中で、世界遺産がどのように取り扱われるかを分析した。学習指導要領に記述されている内容と各世界遺産の持つ価値や特徴を照らし合わせて、どの単元でどの世界遺産が活用されうるかを確認した。

小学校第5学年では地理的な内容を学習する単元で自然遺産を扱った学習が可能であることが確認できた。該当する世界遺産は「屋久島」「白神山地」「知床」「小笠原諸島」の4件であり、それぞれが世界遺産に登録された理由とそれぞれが持つ価値についてまとめ、これら自然遺産を学習することは指導要領の内容と合致していることを確認できた。

小学校第6学年では歴史的な内容を学習する単元で世界遺産を扱った学習が可能であると確認した。全国の小学校第6学年の社会科で採択されている教科書は東京書籍、教育出版、日本文教出版、光村図書いずれかであり、4社の教科書の中で世界遺産に関する記述の有無に関して比較を行った。世界遺産の記述の有無に差があるため、採択している教科

書によっては、授業での取り上げやすさに差が生まれるが、歴史上の主な事象や人物の働きとの関連性を持たせることを考慮すれば、教科書の記述の有無に関わらず、世界遺産を取り上げた授業の展開が可能である。取り上げる場合に最も留意する点として、学習指導要領でも指摘があるように「歴史上の主な事象や人物の働きとの関連に配慮して教材を選択する」という点であることを確認した。

中学校社会科においては地理的な内容と歴史的な内容の2つで世界遺産を取り上げることが可能であることを確認した。第1学年から第3学年で学習する内容と関連性のある世界遺産を取り上げることができ、小学校社会科よりも学習する内容の範囲も広く、扱える世界遺産の種類も増える。特に明治時代の歴史を学習する上で、「富岡製糸場」や「明治日本の産業関連遺産群」を扱うことで日本の産業の近代化の内容を多面的・多角的に考察する上での材料となる。

第4節では第3章で行った分析のまとめを行うことに加え、第2章と第3章を通して得た成果についてまとめた。学校種、学年、教科問わず、世界遺産を扱った学習を行う際には「遺産の価値」について学ぶことが必要であるということが共通項として挙げられる。また、社会科では学習内容の関連性、総合的な学習の時間においては地域との関連性が教材を選ぶ上で非常に重要になってくるということである。教科書の記述の有無に限らず、世界遺産は学習教材として活用することは出来るが、学習内容との関連性を学習の中で明示することが必要になる。その点を踏まえて世界遺産を活用した授業内容を考えていかなければならないことを確認することができた。

(4) 第4章

第4章では第3章までに得た成果を踏まえ、世界遺産を活用した小学校社会科の授業モデルを構築していく。第1節では授業づくりを行う際の視点を3つ挙げた。1点目は世界遺産を扱って授業を行う際に身に付けて欲しい力をどのように設定するかという点、2点目は授業の中で世界遺産をどのように位置づけるかという点、3点目は「遺産の価値」について触れられているかという点である。この章で取り上げる世界遺産「明治日本の産業革命遺産群」は小学校社会科の教科書に関連する記述がないため、授業づくりを構想する際に特に上記の3点に留意し、世界遺産を学習する上で、学習する意義を明確にする必要があった。

第2節では単元の全体構成と授業例を提示した。「明治日本の産業革命遺産群」を教材として、明治時代を学習範囲とする単元で取り扱う際に単元のねらいとしては「明治政府が行った諸改革や明治時代の世界遺産を学ぶ学習を通し、明治時代の人々の暮らしの変化や新しい政治体制について理解することができる」と設定した。産業革命遺産群は日本各地に点在し、関連遺産がある地域の小学校であれば、明治時代の学習内容と関連させて世界遺産を学習することができる。本時案として提案するのは総時間数6時間の単元構成の中の5時間目にあたる授業である。本時のねらいとしては「自分たちが住む地域が明治時代の産業革命にどのように関わっていたのかを捉える」と設定し、岩手県の小学校を想定し、産業革命遺産群の一つである「橋野鉄鉱山」を教材として扱う。日本の産業革命を学習する際に、産業革命に深くかかわった建造物などが世界遺産として登録されていることを事前に確認する。橋野鉄鉱山に関する諸資料の読み取りから、岩手県は明治の産業革命にどのように関わっていたのかを考え、クラス全体で共有する。橋野鉄鉱山を学習することを通して国単位の産業革命に加え、範囲を狭めた地域から見た産業革命についても学習することができる。地域学習としての側面と産業革命を多面的・多角的に考察するという側面を併せ持つ教材として橋野鉄鉱山を位置づけた。授業のまとめでは、橋野鉄鉱山の詳細を学んだうえで、自分たちの地域と産業革命の関わりと遺産の価値について考えたことについて自分の言葉で記述させる。

4. 今後の課題

本研究を通して得た課題を3点提示する。

1点目は、世界遺産そのものを学ぶ、「世界遺産のための教育」としての事例が小学校段階では見つからず、小学校社会科の学習内容との関連を踏まえた研究が不足してしまったことである。世界遺産そのものの価値を大きく取り上げた展開は社会科においては難しいと判断せざるを得ない結果になってしまった。

2点目は、本研究の中では社会科の内容と関連させた世界遺産であることに加え、世界遺産がある地域だけに当てはまるものであり、限定された地域にだけしか言及できなかったことである。本来ならば、地域に世界遺産がない場合でも世界遺産を活用することで学習内容の理解につながるということについて言及しなければならなかったが、他自治体にある世界遺産を活用した実践例の収集が不十分だったた

め、そこまでの考察に至らなかった。

3点目は、授業構想が地域に世界遺産がある場所にのみ当てはまる授業モデルしか提案できなかったことである。課題の2点目に挙げた通り、研究の中で言及できたのが、地域に遺産がある場合にのみ限定されてしまったことが要因である。

この3点について、今後実践する機会があるならば、生徒の実態や学習内容と照らし合わせ、改善していきたいと考える。